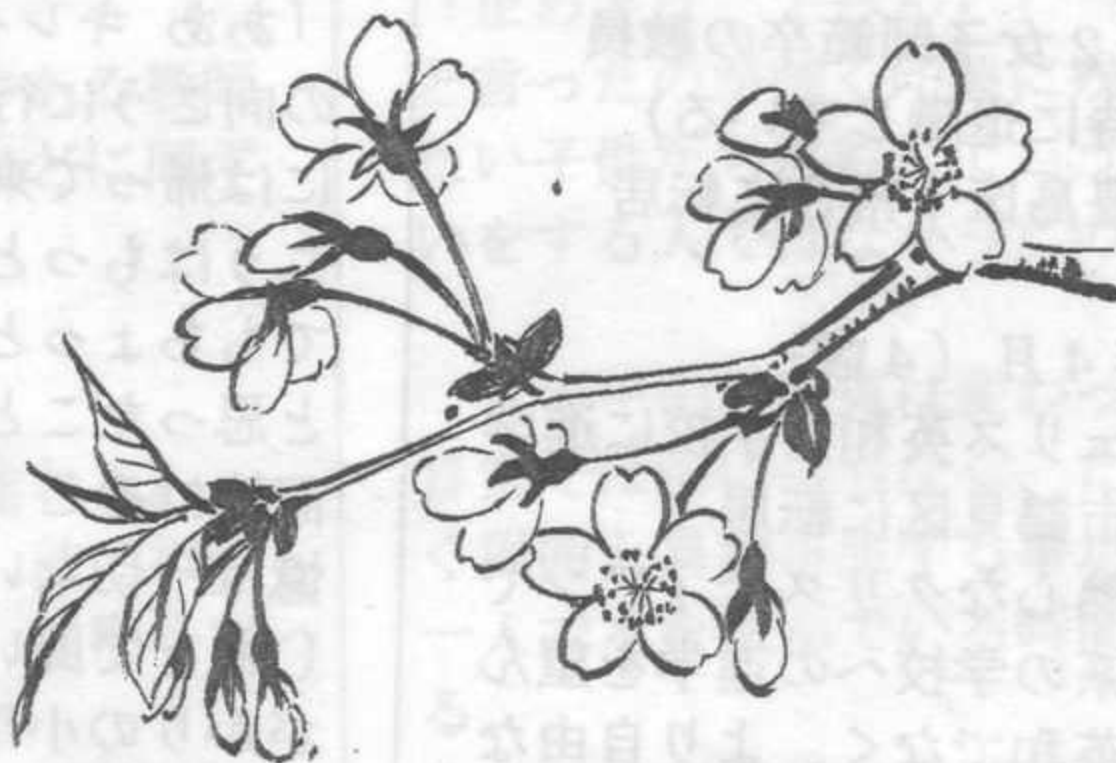


牧 衷

パーソナル・ヒストリー

2010年8月～10月 記



牧 衷 パーソナルヒストリー

2010・8

幼年期 1929年～1935年

家族 と 家庭

○1929年4月

東京府荏原郡蓮沼（現東京都大田区蓮沼）で、父・茂 母・波留江の次男として出生（姉2人・兄1人 妹1人の5人兄弟の4番目）

父は広告代理業「万年社」社員（広告代理業というのは、今の「電通」と同じ業種）

母は東京第2女子師範卒の教員（結婚と同時に退職している）
出生後すぐ豊島区下落合に転居

○1933年4月（4歳）

長姉、フェリス英和女学校に進学に伴い、横浜市鶴見区に転居

父母共に熱心なクリスチアンでミッション系の学校への進学を望んだが、東洋英和でなく、より自由な校風と評判のあったフェリスを選んだところに父母の指向するところがみえるようだ。

この幼児期の家庭の空気は、現在の私にも色濃く刻まれているように思う。

記憶 に 残ること

幼年時の記憶はほとんど無いが、たぶん3歳のころ、近所の「洗い場」と称する小池に転落 この時水底一面にキラキラ輝くきれいな鉱物的なカケラが散乱していて、その向こうに透明な門のようなものが見えた。身体は門の方に流れて行く感覚があり、

「ああ キレイだなーでもあの門の向こうに行ったら、もうこっちは帰って来られないんだな 向こうはもっとキレイなんだろうなでもちょっとさびしいな」
と思ったことは鮮明に覚えている。記憶はそこまで、苦痛や恐怖の記憶は一切ない。

（あとで聞いた話によれば、通りがかりの小母さんが助け上げてくれ、水を吐かせて助けてくれたとのこと）

小学校時代 1936年4月～1942年3月

○1936年4月（7歳）

横浜市立 豊岡尋常小学校入学
以後卒業まで同校に通う。

年長の姉、兄のなかで育ったせいで、小学校入学時の識字力がかなり高く、声を出して本など読もうものなら、

「ア 声出して読んでる」
と兄や姉に笑いものにされた。

○1937年4月（8歳）

2年生に進級。担任が代わり軽蔑する教師から解放され、ホッとする。

同年7月

蘆溝橋事件・日華事変始まる。

同年12月 南京入城

世間は戦勝気分浮かれ、各地で提灯行列など。

この時の担任は、分別のある教師だったらしく世間の動きなどに同ずることなく授業を進める。

○1939年4月（10歳）

4年進級と共に担任が代わる。

若い熱心な新任担任は、前の担任と違って「皇国思想教育」に熱心だった。

（「皇国思想」というのは、天皇を現人神アラヒトガミとし、日本を天皇の国＝神の国として諸外国・諸民族に優越するものとする排外的憂国・国粹主義）

この皇国思想は、わが家の雰囲気とは全く相いれず、先生が熱心であればあるほど、こちらは反皇国になるというわけで、この担任は卒業まで続いたから、3年がかりで、かなり筋金の入った「反皇国主義」少年ができた。

（ここで、「反皇国」というのは、反戦でも、反軍国主義でもない。

それが学校では「サイタ サイタ サクラガ サイタ」と声を合せせ読本を読まされる。恥ずかしくてたまらなかった。

また唱歌の時間に、どうにも納得できぬ歌い方を強制され「この先生 全然わかってないや」とそれ、以来この教師を軽蔑し続ける。

南京入城と共に行われた提灯行列などのお祭り騒ぎが、我が家の食事の話題になったとき、父が一言苦虫をを噛みつぶしたように、

「止めとけ 下らん」と言ったのが強く印象に残る。だいたい子供たちに対してこういう物言いをする人ではなかったのに……

世の中の雰囲気は変わっていたが日常では別に事もなく、ただ何となく周囲と異和が生ずる事が多くなり一人で本を読んでいる時間が長くなる。

小4～6の時代の愛読書は

『銭形平次捕物帖』

『アルセーヌ・ルパン全集』講談社

『少年講談全集』新潮社

『小国民文庫』その他

ラムの『シェークスピア物語』

教文館版（?）

『聖書物語』

子供向けの『ブルーターク英雄伝』など手当たり次第、中に

デル・カーネギーの『人を動かす』なんて言うのまであった覚えがあるから、その乱読ぶりは相当のもの。中でも夢中になったのは、

反国粹主義であって、それに対する「反皇国少年」の思いは「この野蛮人どもめが！」というにつきる)

- 1941年12月 対英・米戦線布告
周囲との心理的マサツは一層激しくなる。

『トム・ソーヤの冒険』
ベッキー・サッチャーのいるトムがうらやましくて、小4～6の3年間はおっぱらぼくのベッキー探しの3年間だった。

でも周囲とソリが合わず、喧嘩の絶え間のなかった「ケンカのチュウチャン」の傍に、お目当ての女の子は寄って来ず、空振りの連続だった。

対米戦の開始に当たっては父がイライラした口調で、「始めてしまったからにや、やらなきゃしょうがない」と呟いていたのが記憶に残る

中学校時代 1942年4月～1947年3月 (旧制中学は5年制)

- 1942年4月 (13歳)
神奈川県立横浜第2中学校 (現翠嵐高校) に入学する。
当時の中学校、とくに公立中学校は小学校より一層 [皇国主義] 的であることは覚悟していたので、周囲とは小学校のときほど激しいマサツはなく、割合のびのびしていられた。
それでも2年生の冬、富士の裾野での冬期軍事演習の際、配属将校のイジメ的訓練に反発して、同盟帰宅を計画して失敗。向こうに非があるので取り立てて罰は受けなかったが、教練の点は6点という要注意人物風の点になった。

- 1944年4月 (15歳)
勤労働員令により、学業休業。
佐倉金属工業という会社で爆弾の弾頭づくりの作業。機械工作はいやではなかった。
このとき、旋盤、ボール盤、ミール盤、フライス盤などの工作機械を

小学校6年生ころに始まった模型飛行機づくりに熱中 以後中学校3年まで模型飛行機づくり。よく飛ぶ模型飛行機を作ろうと思えば、その製作過程・調整過程は必然的に、仮説・実験の繰り返しになる。仮説・実験的な指向の癖はこのときについたような気がする。

(たまたま父の従弟が当時三菱の航空本部長 [技師長] で模型飛行機づくりの名手でもあったので、この人を通じて、模型飛行機の理論の初歩を教わり、めったやたらな試行錯誤はしないですんだ)

中学1年のときに読んだ『吾輩は猫である』の迷亭先生におおいに共感。生涯を通じて変わらぬ「高等遊民」指向はこのときにできた。

(高等にはなれなかったが、遊民にはなれたような気がする。こうしてみると、今更ながら、ごく子供のころ

扱った経験は後年（当時、左翼の日本資本主義分析の聖典のように扱われていた）山田盛太郎の日本資本主義分析の観念性をうけつけぬ素地となった。

○1945年4月（16歳）

海軍兵学校入校（78期）

たいした期待もせずに入った学校だったが、このときから4ヶ月の海軍兵学校生活は、なかなか含蓄のあるものだった。

その一つは言われたことを言われたとおりにやっていることの気楽さ。

「反皇国少年魂」を捨てず周囲との心理的葛藤に明け暮れていた日々と比較すれば、肉体的にハードな訓練などとるに足りない。

それに加えて、教育の徹底した結果主義が一層心を軽くしてくれた。何かできない課題（たいていは体育的課題）があると

「こんなこともできないようじゃ、貴様の兵隊死ぬぞ」と叱られる。

「お前のこことなんかどうでもいいお前の指揮下にはいる兵隊たちの命はどうする気か」というのだから、これはこたえる。

そこで頑張ることができるようになると「ヨシ」

と言われるだけ。皇国主義教育についてまわった根性主義の「みる、やればできるじゃないか」（それなのにできなかったのは根性が足らんからだ）というお説教は一切なし、まして、忠義の心が足らんなどという皇国思想の押しつけはない。

この「清々しさ」が反皇国少年には棲み易かったのかもしれない。

中でも、英語の授業中、つい派手な居眠りをしていたのを教官にみつ

ろの記憶が、ぼくという人間の形成に存外大きな影響を持っていることに驚く。三つ子の魂百まで、雀百まで踊り忘れず……)

半分強制的な受験。いやだといえど周囲から何を言われるかわからず、受けるだけは受けようという程度の気持ちの受験だったが、最初の時間の数学の問題が、バカバカしい程易しくて、それを見た瞬間「なんだ 大人は子供を馬鹿にしやがってこんな侮辱を受けて黙っていられるか」と無性に腹が立ち、前後の見境もなく答案を書いてしまった。そうしたらしばらくして兵学校から電報がきた。

「キクン ヘイコウニ ゴウカクセリ ニュウコウノ イシ アリヤ ナシヤ ヘンデンセヨ」というのである。こう改まって意志を問われると覚悟の受験でないだけに動揺するイシナシなどと変電すれば行かなくてもすむかもしれないが、世間（子どもにも世間はあるのです）から何を言われるかわからない。といって、敗色濃厚なこの時期に志願して軍の学校に入るとするのは、戦死を志願するに等しい。どうしたらいいか、さすがに往生して二晩寝ずに考えた。とにかくなんとか志願の戦死を自分に納得させる理屈をヒネリ出さなければ「戦死の志願」などできるわけもない。紋切り型の「天皇のため」「国のため」「父母のため」等々の理屈には到底承服できない。といって「入校の意志ナシ」と変電すれば、周囲からは「非国民」「売国奴」の罵声はおろか直接の暴力さ

かったとき「これは顔がカボチャになるな」と覚悟をしたら、教官は「ねむいときに無理やり起きていようとするくらいバカなことはない。ねむるまい、ということだけに精神が集中して授業のことなど何一つ頭には残らない10分経ったら起こしてやるから10分間寝ろ」

といわれたとき、入校時肺間リンパ線肥大の診断を受けていて、心底疲れきっていたので、欲も得もなく言われた通り眠ってしまった。10分経ったら起こされて、何事もなかったように授業が続けられた。

これは子供のときからの被教育体験の中では画期的なできごと、まさにカルチャーショックだった。

こんな経験をしたが入校3週間で肋膜炎で入院。以後敗戦まで各地での病院暮らし。正味の兵学校生活は3週間で終わったが、このときの被教育体験はぼくの教育観に大きな影響をもった。

○1945年8月(16歳)敗戦

8月末貨物列車の台車に積まれて帰郷。岩国では線路脇に電信柱の数ほどの爆弾の跡の穴があいているのにびっくり。空襲の激しさを知る。

広島は一望 なにもなし。岩国ほどのひどさは感じなかったが、電線にひっかかった衣類や、あたりに立ちこめる人を焼く匂いに「こういうことか」と妙に納得する。

え覚悟しなければならぬ。進退きわまって、二晩ほど寝ずに自分を納得させる理屈をヒネったあげく、「俺がB 29に体当たりすることで、近所に住んでいたくベッキー候補の女の子の命が10分間でも永らえることになるんなら、俺にも戦死する意味がある」という理屈をつけて「入校の意志あり」と変電する。

(人間感傷的に成りさえすれば、意外に簡単に死ぬことができるという心理学上の典型例の一つか)

「終戦の詔勅」の放送はガーガー言って、何を言っているのだからよくわからず、多分、英・米と講話、対ソ戦は継続という内容だろうと思っていたのが全面降伏と聞いてびっくり。

泣いている奴もたくさんいたが当方の感想は「ヤレヤレ終わったな」という程度のもの。ただ、その日の夜、寝床の中で「敗けてこれからどうなるんだろう」と考えているときふと「亡国の民」という言葉が頭に浮かび、シューマンの「流浪の民」という合唱曲のメロディが思い浮かんだら急に涙が出てきて止まらなくなった。

同年8月末 帰宅。

幸い家は焼け残り、肋膜炎の予後とあって、10月頃まで寝て過ごす。その後中学4年に復学。

しかし、学校も半休業状態。映画館と闇市の間をウロチョロして日を過ごす。

この間、受験のための英語の勉強はまったくの蘭学事始状態。大きな字引と首っぴきで、漢文式英語解説法を身につける。(おかげで今でも読めはするが、聞くこと、話すこと書くことは一切できない)

国が敗れて「亡国の民」を想い涙を流した身だったが、いざ「国が敗れ」て見ると……

闇市の中で、ほとんど「生物学的人間」に還元されてしまった人々の様相をみて、この何千万もの人々の生活を根こそぎにすることなど占領軍にもできぬことに気がつく。

当時つけていた日記に「国破れて山河なし、あるのは人々の生活」と書きつけた憶えがある。国家と社会の区別もつかなかった少年の社会科学的認識のはじまり。

高等学校時代 1947年4月～1950年3月

○1947年4月(18歳)

旧制東京高等学校理科Ⅱ類(ほぼ現在の東大教養学部理科Ⅲ類に当たる)に入学。

高等学校時代の3年間は、ほぼクラシック音楽のレコードを聴きまくることに費やした

東高は現在東大教育学部の付属実験学校になっている幡ヶ谷にあったのだが、戦災で使用不能となり三鷹の旧中島飛行機の工場跡に仮住まいをしていた。横浜市の鶴見から学校まで、2時間以上の通学時間をかけて通うことになった。

幸か不幸か通学の途中、中野に「クラシック」という「音楽喫茶」があった。

「音楽喫茶(名曲喫茶)」というのは、それなりのレコード・ライブラリと再生装置を備えた喫茶店で、客の注文に応じてライブラリの中のレコードをきかせてくれる。というシステムの

高校時代3年間は、左記のとおり、「名曲喫茶通い」に明け暮れていたため、学校での出来事の記憶はとくにないが、ただ一つ、ドイツ語での授業の記憶が残る。

まだはいりたての頃だったが、与えられたリーダーの中の一節が、どうにもツジツマがあわず、わけの分からぬことになった。ここで当たったら大変だと思っていたのだが、幸いぼくには当たらず、他の生徒に当たった。ヤレヤレとホットしたら、当てられた奴もぼくと大同小異のシドロモドロである。

先生(大修館の独和辞典の編者だった富山芳生教授)は、「なぜ、そんなことになるんだ？」

店である。

当時レコードは貴重品で（たとえばベートーヴェンのピアノ・ソナタの全曲を揃えようとすれば大学卒の初任給の4ヶ月分を投入しても買えなかった）なかなか買うこともできなかったのだが、この店のライブラリは驚くほど豊富で、憧れの的だったモーツァルトの四大オペラやベートーヴェンのミサ・ソレムニスをはじめとして、名ばかり知っていても聴いたことのない名曲がカタログにズラッと並んでいた。

当時、戦争ボケと肋膜炎上がりということもあって、20歳以降の自分というのを想像することも難しかった。ぼくは心底「これを聴かずに死なれるか」という想いで名曲喫茶通いを続けた。

注文は1日1回一曲限り（長い場合はほぼ30分）というのが「きまり」だったのでベートーヴェンのピアノ・ソナタ（全部で32曲）を聴くには、32回通わねばならず、1回聴けば良いというものでもないから、何回も繰り返し聴く曲も出てくるので、<ベートーヴェンのピアノ・ソナタを聴くだけでも3ヶ月くらいは楽にかかる>ということになる。

こんな調子で「これを聴かずに死なれよーか」をやっていたら、学校に行くヒマなどほとんどない。たまたま旧制最後の学年なので下がいない。まさか、落第なんてあり得ない、とタカを括って「名曲喫茶通い」を続けていたら見事に落第。旧制の東大に行きそこなって新制に、ということになってしまった。

と訊く。生徒は

「変とは思いましたが、辞書にこの語の意味はこうと出てたんで、無理矢理コジつけました」と答えた。

先生は「えーっ？」と聞いて彼の辞書を手に取る。ぼくと同じ「コンサイス独和辞典」である。先生は一見「ああ、誤植だ」という。ぼくは当然先生が、この語の意味はこれこれ「やり直してごらん」と教えてくれるものと思ったが、先生はその辞書をポンと机の上に投げ出して「ああ、情けない」というのである。

「君は変だ、と思ったんだろう。だったらなぜ、他の辞書を当たってみないんだ。本に誤植はつきものだ。何で君は自分の頭が信用できないんだ。変だと思ったら本屋の立ち読みでもいいから他の辞書を見さえすれば君はこんなミットモナイ姿をさらさずに済んだんだ。ああ、情けない」というのである。

当時辞書も不足でクラスの半数以上の生徒は、コンサイスのお世話になっていたから教室中肅然。ぼくには大ショックだった。「ああ恐ろしい。俺はとんでもない学校に入っちゃった。ここはもうお勉強するところじゃない。学問をする学校だ。俺こんな学校に入っちゃって、やっていけるかな」と不安になったことが鮮明に記憶されている。

兵学校での居眠り事件とこの二つぼくの二大被教育体験で、ぼくの教育観の根底をつくった記憶である。（にもかかわらず、学校に行くことを抛り出して、音楽ばかり聴いていたのだから、これは「自分の頭を信用したことになるのか、ならないのか……」）

大学時代 1950年4月～1957年3月（なんと8年間……）

学校でのこと

○1950年4月（21歳）

東京大学（新制）教養学部理科Ⅱ類（現Ⅲ類）に入学。

まだ高等学校の学生時代だった1948年ころから占領軍（米軍）の政策は、占領当初の日本の民主化政策から露骨な冷戦政策へ転換した。この政策転換に対応してぼくの中でも反占領政策と結びついた革命指向が次第にはっきりしてきていた。大学入学の頃には「俺は学生運動をやりて大学に行くんだ」と周囲にも言うようになっていた。

ちょうどそのころ、大学では前年の7月に出た、占領軍の「共産党員及びその同調者の社会的排除」の方針に基づき、占領軍の教育顧問イールズ氏が「共産党員教授追放」講演会を全国の大学を巡回して行って、これに対する抗議行動が展開されていた。

入学後、直ちにこの運動に参加。

同年9月

東大教養学部レット・ページ反対の試験ボイコットに成功。

春からの運動の過程で、日本共産党（国際派）に入党。

国際派については（註1）参照

○1951年2月

日本共産党（主流派）第4回全国協議会「武装闘争方針」を決定。

学外でのこと

（註1）日本共産党の分裂と国際派

1950年1月にコミンフォルム（実質的な全世界の共産党の指導部）は、当時の日本共産党の綱領を激しく批判し「直接的な反占領軍闘争を中心課題にすべきだ」と論じた。

冷戦の開始と共に、占領軍の反共政策は露骨かつ極めて乱暴に行なわれたから、それに対する抵抗の機運は共産党員のみならず多くの人々に共有されていた。

日本共産党は当然この反共弾圧に対する抵抗を行っていたが、徹底的弾圧を恐れて、直接的な反占領軍スローガンは避けられていた。コミンフォルムは、これに対してShow the flagと迫ったのだ。

コミンフォルムのなんとも拙劣で居丈高な批判は、日本共産党中央の多数に激しい反発をひきおこし、これら多数派の中央委員と、直接的反米スローガンを掲げることに賛成の少数派中央委員の間に深い溝ができ事実上中央委員会には二派（多数派＝主流派 少数派＝国際派）に分裂する。東大細胞は国際派に属した。

（註2）レット・ページ反対闘争

1950年の春から秋にかけての東大駒場での運動の経験は多くのも

同年8月 コミンフォルムは国際派に対し、自己批判して主流派に合流せよと指令。東大細胞混乱。

同年10月 細胞解散。

ぼくは「武装闘争方針は誤りである」と主張し続けたため復党は認められず（処分上は除名）学生運動の外に締め出される。

締め出しと同時に「党の敵」とレッテルを貼られ、学校に行くと昨日まで「同志」であった奴がぼくを尾行し、学内でのぼくの行動を監視はじめる。いやになって一切学校に行くことをやめる。それでも、その間、試験だけは受けてボチボチ単位を溜めて、

○1953年4月（24歳）
農学部農業土木学科に進学。

○1954年4月（25歳）
文学部西洋史学科に転ず。

○1955年7月
日本共産党第六回全国協議会
それまでの「軍事方針」を自己批判
軍事方針に反対して党外に追放されていたメンバーに対する復党工作はじまる。

のをもたらしした。ぼくの運動論の原型はここで与えられた。

※この点については『運動論いろは』（季節社）にやや詳しい記述がある。（P42～54）

[論論理を通して穴に落ち] [行方見えねば人寄らず] [理外に理あり他人の理] [極端を考えて正解を知る]

学校に行くことを止めたぼくは、駒場に移ってからも続いていた「クラシック」通いの中で知り合った友人たち、とくに花田英三（詩人・現在沖縄在住）と親交を深め、花田と共に1920-30年代の詩・音楽・絵画の世界にのめりこむ。

ぼくの文芸的教養の大部分はこの時期に得られたもので、とくに、花田清輝の評論、石川淳の小説と評論に大きな影響を受ける。

（花田清輝の「対立物を対立のまま統一するところに運動が生まれる」という運動観、石川淳の「精神の運動＝視点転換の自由さ」の大切さの指摘）

など、ぼくの発想法の原点はここにあるとあってよい。

また、この期間、スターリンの『言語学におけるマルクス主義の諸問題』毛沢東の『実践論』『矛盾論』『延安文芸講話』などへの批判からいわゆる「マルクス・レーニン主義」から離れた独立コムニストとしてやって行くという覚悟がついた。

六全協後、ぼくのところにも復党のお誘いがかかるが断る。
しかし、結局、島成郎（後のブンド創設者）の泣き落としにかかって、翌56年1月復党。

○1956年1月(26歳)

学生運動に復帰。都学連書記局員として潰滅状態にあった学生運動の再建に着手。この過程で高野秀夫(早大)と知りあい親交を結ぶ。

同年6月(27歳)

全学連第8回大会で、全学連副委員長・都学連委員長となる。

(全学連書記長 高野秀夫、中央執行委員に島成郎、委員長の香山健一は、シャッポで、実際は、牧・高野・島の三頭体制)

同年10月

砂川基地拡張阻止闘争で警官隊と衝突 政府は測量の中止を声明。

○1957年6月(28歳)

砂川闘争後、政治方針をめぐる、全学連中央内多数派と亀裂が生じ、全学連第10回大会で、高野秀夫と共に全学連退任(路線論争で敗けてしまった)

○1958年3月(29歳)

文学部西洋史学科卒業
札幌の活動家に就職口はなく、卒業後はしばらくフリーター暮らし。

岩波映画時代

1959年6月～1987年6月

映画と科学教育

○1959年6月(30歳)

岩波映画製作所に、TV番組「楽しい科学」の企画・脚本スタッフとして入社。

(註) 復帰後の運動については

「高野秀夫と共にみた夢」(『早稲田1950年・資料と証言第4号』所収・上田仮説出版『仮説実験授業と牧衷運動論シリーズ7』に転載)にやや詳しい記述があり『運動論いろは』他に、いくつかの記述がある。

1958年5月 花田英三・竹内泰弘・高良留美子と同人誌「南方」創刊 短いエッセイを書く(2号で廃刊)

その他

○1959年10月

野川治子と結婚
練馬区豊玉に転居

1962年12月番組終了まで書いた作品のほとんどは、岩波映像製作（販売 仮説社）のDVD「岩波たのしい科学教育映画」第1集・第2集に復刻されている。

○1961年?月（32歳）

板倉聖宣と再開（50年のレット・ページ反対闘争以来）

彼のアドバイスを受けて、何本かのシナリオを書き、番組にのせる。

○1962年?月（33歳）

板倉から「仮説実験授業」の構想をきき、おおいに共鳴。

○1965年1月（36歳）

岩波映画に科学室創設。室長として岩波映画製作の科学教育映画全体をみることになる。同時に「岩波・科学教育映画体系」のプロジェクトをはじめる。

○1966年1月（37歳）

「科学教育映画体系」第1回作品

<力のおよぼしあい>完成

以後、1972年4月 プロジェクト終了まで、24本製作。

（科学教育映画体系24本は、すべて「岩波楽しい科学教育映画」シリーズ第1集にDVD化されている）

○1973年4月（44歳）

第15回科学技術映画祭に際し、科学技術功労者特別表彰を受ける。

○1961年6月

日本共産党反対派の大量離党に際し離党（処分上は除名）高野秀夫・直原弘道・齋藤驍と共に「構造改良派」グループをつくり、離党組の結集を測るが、離党者の思惑は様々で百鬼夜行状態。結集をあきらめて、独立小グループで活動することにする。

（註）構造改良（革）派

1956年のソ連共産党20回大会での「スターリン批判」とくに革命の平和的移行の可能性の承認を契機に、ヨーロッパ諸国（とくにイタリア）共産党を中心に形成された共産主義運動の中の一潮流の総称 社会民主主義への傾斜が強い

○1965年3月

横浜市鶴見区の旧居に転宅

○1969年5月

花田・高良・竹内らと文芸同人誌「蛸」発刊。2号から滝口雅子・多田智満子が加わる。

○1970年1月

高野秀夫・直原弘道・齋藤驍らと政治同人誌『構造改良』発刊

73年末までに8冊発行「大衆運動の認識論的基礎」を連載。仮説実験授業と1950年代の学生運動との類似点を論じて、セクト的運動を批判（末期の「全共闘」運動への批判が目的）

○1975年6月（46歳）

岩波映画取締役役に就任労働組合との対応に忙殺される。

○1987年6月（58歳）

岩波映画退社

この間の作品については、記録映画保存センターのホームページで検索可能。そのうちのいくつかは「岩波たのしい科学教育映画シリーズ」のDVDに復刻されている。

○1975年夏

日本化学工業の「六価クロム」汚染問題を取り上げ、被害者救済の運動を始める。結局長く続く法廷闘争となったが、81年結審。全面勝訴。（この運動については『運動論いろは』に多少の記述がある）

○1979年9月

『構造改良』の同人たちと『共和国通信』発刊（2号まで）マルクスレーニン型社会主義につくづく愛想をつかし、誌名から「社会主義」が抜けている。

○1983年3月

学生運動時代以来、つねに政治的行動を共にしてきた友・高野秀夫死去（享年51歳）

年金生活時代

1987年6月～現在まで

岩波映画をやめてからも、しばらくの間（1995年ころまで）は、フリーのシナリオライターとして、科学教育・科学技術に関する映画のシナリオを年間2・3本ほどのペースで書く。コンビを組んでくれたのは、岩波以来の仲間の中神賢史氏（この間の作品のいくつかは手許のビデオテープで見ることができる）

ここからの記述は二段にわけると必要もないのでヤメにします。

○1990年代の初頭から、小田急電鉄の複々線化の伴う高架工事に対する反対運動に参画。当時あたかも補償金額の増額運動のような趣気のあった運動を東京の都市計画の問題として捉え返し、地下化を要求する運動につくりかえる。

（中心は齋藤驍）この過程で、地下化を求める「市民専門家会議」（座長は50年学生運動の中心にいた法政大学教授・カ石定一）を組織。コーディネイターとして都との折衝などに当たる。結局、運動は工事計画の行政的妥当性をめぐる法廷闘争となり、これまでの＜訴訟の権利者は、地権者に限る＞という判例を覆しく工事に影響を受けるものは訴訟の権利がある＞という最高裁大法廷の

判決を引き出した。(2003年?月)

○1996年~1998年(67~69歳)

法政大学工学部特任講師として「技術社会論」を担当(このときの講義速記は、上田仮説出版・佐久市局・北村秀夫さんのガリ本となっている)

○1998年8月(69歳)

季節社から『運動論いろは』出版

○2000年9月(71歳)

力石定一と政策提言誌『発想』出版(季節社)

○1990年代のはじめからほぼ毎年1回、上田仮説実験授業研究会の肝いりで、かなり自由にぼくに意見を言わせる会が開かれている。

ここで喋ったことの主なものは、上田仮説出版のガリ本『仮説実験授業と牧衷運動論シリーズ』(現在までに7冊発行)におさめられている。シナリオを書かなくなってからは原稿用紙の升目を埋めることも少なくなって「お喋り」ばかり、少々、迷亭先生みたいになってきたかな・・・と思える今日このごろです。

終

○2010年10月(81歳)